

名詞の後置修飾としての 関係詞節と分詞句の用法

河 上 邦 雄*

Use of Relative Clauses and Participial Phrases as Appositive Modifiers of Nouns

Kunio Kawakami

In Japanese, adjectives, adjectival phrases or clauses always come before the noun or pronoun which they describe or modify, while in English, all of the adjectival clauses and most of adjectival phrases come after the head words they modify.

This difference in sentence structures causes one of the difficulties that Japanese learners face in learning English. In order to use English correctly and effectively, students have to get used to this particular structure of noun modification in English.

In this paper the use of participial phrases and relative clauses as noun modifiers in editorials of the New York Times newspaper have been examined in a comparative way. The reason why the NYT editorials were chosen as the subject of this study was that they are generally thought to offer some of the best kinds of essay writing in present-day English.

As a result, the following facts have been found: 1) The cases of present participles placed after nouns as adjectival phrases are very few in comparison to those of relative clauses. On the other hand past participles are frequently used after nouns as modifiers. When modifiers are used in the sense of passive voice, the structure of modification almost always takes the pattern of 'noun + past participial phrase'. The pattern of 'noun + relative clause in passive voice' is scarcely seen. 2) When an antecedent is not a person but a thing or an animal, the relative pronoun is always 'that', and 'which' is never used. 3). With regard to the genitive case of a relative pronoun, 'whose' is always used even when its antecedent is a thing or an event.

I. まえがき

Writing の学習の前段階として、英語の文章構造（語順）の正確な認識と理解が求められる。とくに英語と日本語において、その構造がまったく異なるものには綿密な考察と検討を行い、新しい

* 教養部

言語の構造に習熟するために十分な練習を積む必要がある。英語においては、名詞（および名詞相等語）の修飾の仕方は、修飾語（句）が修飾される名詞の前に置かれる場合と後に置かれる場合の二とおりがある。G.O.Curme の 'Syntax' の用語に従えば "adherent modifier" と "appositive modifier" がそれである。前に置かれるのは原則として単独の形容詞が修飾する場合であるが、例外的に句による修飾語句が前置される場合もある。一方、関係詞節や、分詞句、前置詞句など、複数語句による修飾の場合はほとんどすべて後置修飾となる。後置修飾という修飾の仕方は日本語にはないので、日本人には英語学習の大きな困難点の一つとなる。本研究では、ニューヨークタイムズの社説論文を対象素材として、名詞の後置修飾としての関係詞節と分詞句が、それぞれどのように用いられているかを調査、比較検討し、その実態を明らかにしようとしたものである。なおこの研究は、福井工業大学の特別研究費による研究成果の一部である。

II. 本研究を行う理由と目的

英語の名詞、代名詞にかかる修飾語句の構造・型の特徴と用法の指導は、英語の作文の指導において重要な課題のひとつとなる。なぜなら、複雑で高度な内容の観念、思想、感情を表現し、伝達しようとするれば、修飾語句によって、文中に用いられる名詞のもつ、厳密な意味あるいは微妙な色合いを規定し、特定化することが必要不可欠であるからである。

ところで、英語の名詞（相当語）の修飾の仕方には二とおりある。すなわち修飾語句が

1. 名詞の前に置かれる場合 (Adherent attributive modifiers)
2. 名詞の後に置かれる場合 (Appositive attributive modifiers)

前に置かれる型は、日本語の場合と同じで、日本人にとってほとんど問題にならない。問題は後置修飾型である。この後置修飾型には次のものがある。

1. 句によるもの：
 - A. 前置詞句 I saw a girl *with blond hair*.
 - B. 分詞句 The boy *sleeping in the bed* is my son.
 - C. 不定詞句 He was the first man *to come*.
 - D. その他 Look at the meadow *down there*.

2. 節によるもの： 関係詞節 The boy *who is sleeping in the bed* is my son.

このように修飾語句が修飾する言葉の後ろに置かれるという修飾型は、日本語にはない言語構造である。そのためこれらの構造を理解し、それらに慣れるということは、日本人の英語学習者にとって大きな困難点の一つとなっている。しかし、この構造、パターンに習熟しなければ、高度な英文を讀んだり、ましてや書くことはできない。それではそれらをマスターするためにはどうしなけれ

ばならないか。言語学習におけるすべての新しい文法事項の習得にあてはまることであるが、次の二つの段階を踏むことになる。

1. その事項がどのように用いられているか、実際の例を広くあつめ分析、検討する。そしてそれらの代表的なものを指導のための教材に編成する。
2. それらのモデル教材によって、まずその事項に対する理解を確実にし、ついでその正確な運用を可能にするため練習を行う。

本研究は上の二つの段階のうち第一の段階の研究作業を行うものである。そして今回の研究の対象となる事項は、英語における名詞の後置修飾型のうち、分詞句によるものと関係代名詞節によるものの用法であり、その実際例を現代の代表的な文章の中に求め、収集し、もって日本人学習者の英語の運用力、特に writing の能力を高めるための教材作製に資することである。

III. 研究調査対象と方法：

上に述べた第一の段階の研究をすすめるにあたって、まず問題になるのは、目的とする文法事項の用例をどこに求めるかということである。本研究ではモデルとしての用例の調査収集の対象をニューヨークタイムズの社説論文に置いた。その理由は、いま日本人が讀んだり、書いたりすることを学ぶもっとも必要なタイプの英文は議論文であると思われるからである。政治、経済、学術の分野において日本の占める役割は大きくなる一方である。そこで日本人が貢献するためには、世界の人々と交渉し、議論し、知識や技術の伝達交換ができる英語力が要求される。その際にもっとも必要な英語のスタイルは議論文のそれである。この観点から議論文の代表の一つとして新聞の社説を最適なものとして選んだ。ニューヨークタイムズは、いうまでもなく、アメリカを代表する新聞であるばかりでなく、世界でもっとも信頼され、重視されているニュースソースでありオピニオンリーダーであるからである。

今回の研究で、分詞句と関係詞節による後置修飾型の用法の実態を調査・研究するために、資料の調査収集の対象としては、1996年10月と11月の同紙に掲載された100余篇の社説を第一次対象として同用法の傾向の概観をつかみ、ついでその中から20篇を選んで、各用例を項目別に厳密に調査検討し、その事例数を数えた。20篇の選択の基準は、日本人にはなじみのないローカルな内容のものは避け、日本人にも分かりやすく関心のもてるものとした。それらの社説には No.1 から No.20 の番号を付し、本論文中に例文を引用する場合は、引用された例文を含む社説論文の番号とタイトルを付けた。調査分析は、分詞句後置修飾としては過去分詞、現在分詞の別に、関係詞節後置修飾では、主格、目的格、所有格などの別に行い、その事例数を一覧表にまとめた。以下この表を参考にしながら、調査結果について詳しく述べていきたい。

IV. 調査結果とその分析：

Table 1 FREQUENCY OF APPOSITIVE MODIFIERS (PARTICIPLES)

Editorial No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	Total	Aver.
Past Participle	2	2	2	4	2	1	2	3	0	0	3	0	0	1	1	3	0	2	5	0	33	1.65
Present Participle	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	5	0.25
Freq. per an edit.	2	2	4	4	3	1	2	3	0	0	3	0	0	1	1	4	0	2	6	0	38	1.9

Table 2 FREQUENCY OF APPOSITIVE MODIFIERS (RELATIVES)

Editorial No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	Total	Aver.
Nom. THAT	2	2	0	3	0	3	3	4	2	3	2	3	2	2	1	5	1	6	2	2	48	2.4
Nom. WHO	2	1	0	0	0	4	1	1	2	0	5	0	1	0	0	0	1	0	1	1	20	1.0
Acc. THAT	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0	*1	0	0	0	0	1	0	0	6	0.3
Acc. Omitted	0	0	0	1	0	2	0	1	2	0	1	0	0	2	1	0	1	0	1	0	12	0.6
Prep. + WHICH	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	6	0.3
WHOSE	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.05
Freq. per an edit.	4	3	0	7	0	10	4	8	7	3	8	4	4	4	2	5	4	8	5	3	93	4.65

*that... upon

IV-1. 分詞句による後置修飾：

A. 過去分詞句によるもの：

Appositive modifier としての分詞句の用法では、過去分詞によるものはかなり数多く使われている。対象20編の社説の中で過去分詞の形容詞句が用いられている例は33例ある。それに対して、受動態の関係詞節を用いた例は一例だけである。ここでは“the principle of brevity”がかなり徹底して貫かれていることが分かる。その理由は、過去分詞で始まる修飾句は結局すべて受動態の文構造 (s + be + past participle) をもった関係代名詞節と equivalent である。もし両者に意味の上で違いがなければ、分詞句にすることによって s + be の部分を省略し、文章を簡潔で引き締まったものにすることができるからである。

唯一の受動態の関係詞節がみられるのは、No.4 の“A New Way to Look at Prices”と題した社説であるが、この社説でもほかの4箇所では関係詞節ではなく、過去分詞句になっている。それでは、この社説の筆者は同じ社説の中で、なぜ一回だけ、分詞句を避け、ほとんど見ることもない受動態の関係詞節を用いたのであろうか。

Congress can take the number and run -- but only if it insulates the poor from an adjustment *that is based on smart guesses but not precise knowledge.* (Ibid.)

ここでは adjustment が、正確な知識あるいは客観的な事実ではなく、都合のいい推測によっていることに筆者は批判的であることを示すために、より強い限定修飾表現を採ったのである。

adjustment based on では、単なる事実、a matter of course として述べているだけになる。

B. 現在分詞句によるもの：

現在分詞を使った後置修飾型の例は意外に少ない。今回の調査対象論文のなかでわずか5例しか見いだせなかった。

1. Deng Xiaoping's market reforms liberated an economy *suffocating under central controls* and set off one of history's greatest economic booms. (No.3; Arrested Progress in China)
2. The authorities should be heeding, not stifling, voices *urging them to face up honestly to issues like inequality and official corruption*. (Ibid.)
3. There has long been a cyclical quality to the troubles *besetting Pakistan and Ms. Bhutto*. (No.5; Upheaval in Pakistan)
4. About a quarter of the new rooms are in facilities *providing social services*. (No.16; How to House the Homeless)
5. She, nevertheless, conducted various economic analyses, as required by an executive order *asking Federal rule-making agencies to make available their best estimates*. (No.19; The Looming Clean Air Battle)

例1, 例2は“Arrested Progress in China”という題の社説にみられるものである。先に述べたように、現在分詞が後置修飾句として用いられているのは、全社説の中でわずか5例である。そのうちの2例がこの社説で使われている。その一方でこの社説の筆者は関係詞節をまったく使っていない。このような例はきわめてめずらしい。社説は複数の論説委員によって書かれるから、文体の相違と考えるべきであろう。

第2の例では、heeding, stifling と現在分詞が続いたあと、that urge とするよりは、さらにurging と -ing 形をくりかえしてリズムを整える方をよしとして選んだのであろう。

第1の例では、“an economy suffocating under central controls...”は“an economy suffocated”でもよいように思われるが、suffocating としたのは同じ筆者の好みであろう。なおこの筆者は後置修飾型として関係詞節を用いていないのであるが、代わりに、不定詞をふくめて前置詞句による後置修飾を多く用いている。

例4では providing ではじまる分詞句が facilities の後置修飾句として使われている。ところが、同じ社説の中に、“that provide...”と関係詞節になっている箇所が2つある。

- a)...the most effective way to care for much of the homeless population is through supported S.R.O.'s -- single-room-occupancy hotels *that provide extensive social*

services to help people rebuild their lives.(Ibid.)

- b) But with the state and Federal governments cutting back on funds *that provide the support services*, the advocates will need to be patient.(Ibid.)

これらのケースにおいて、分詞句によるもの、関係詞節によるものそれぞれが、かならずその形式でなければならないという必然性はなく、たがいに置換可能 (interchangeable) である。

これは例3及び例5の場合にも言える。それぞれ “that besets”, “that asks” と置き換えて差し支えないと考えられる。ただ例3の含まれる社説では、後置修飾型としての関係詞節つまり制限の用法の関係詞節は一度も使われていない。3回現れる関係詞節はすべて叙述用法のものである。

それでは、どうして、現在分詞による後置修飾句の例は、過去分詞や関係詞節によるものにくらべて、いちじるしく少ないのだろうか。それには次の理由が考えられる。

1. 関係詞節で分詞句に置換できるのは関係詞が主格の場合だけである。
2. 分詞は verbal であるから人称 (Person), 数 (Number), 法 (Mood) についての形態変化がない。時制 (Tense) についても完全な形は備えていない。したがって、これらの正確で十分な表現を必要とする場合は finite verb を備えた関係詞節を用いなければならない。
3. 分詞は、いわゆる分詞構文を構成し、副詞節に代わるという重要な機能を果たしている。そのためこれと形が似ていて紛らわしい分詞句を形容句として用いることを避けようとする傾向がある。
4. 現在分詞はまた動名詞とも形が同じである。動詞と名詞の働きを兼ね備える動名詞は、英語の文章の中で需要度が高く、文の主語、動詞の目的語、補語さらには前置詞の目的語としてきわめて頻繁に使われている。それで現在分詞を修飾句として用いることを控え、動詞の -ING形 の使用度が極端に増えることを避ける規制が働いているのではないだろうか。

IV-2 関係(代名詞)節による後置修飾:

次に後置修飾型としての関係詞節の使用例をみてみよう。(なお今回は調査対象を関係代名詞節に限定し、関係副詞節はとりあげなかった。)

名詞の後置修飾型としての関係詞節の用例はそうとうに多い。全20編の社説文のなかで用いられている後置修飾型としての関係詞節の例は93であり、1編あたり平均5回使われていることになる。これらの中でもっとも用例の多いのは、主格の that で48例、ついで who が20例、全部で68例で全体の4分の3を占めている。

これに対して、目的格の関係代名詞による関係詞節は18例である。そのうち12例は関係代名詞が省略された形になっている。

関係代名詞が前置詞の目的格となっていて、前置詞 + which の形のものは6例みられる。前置詞が関係詞節の末尾に置かれた例は2例である。所有格の whose の例は1例だけである。

A. 主格 (Nominative) の who 及び that:

先行詞が人間である場合はすべて who が使われている。先行詞が neuter すなわち物 (thing) や impersonal な生物である場合は that が用いられ、which は使われていない。これは注目すべき事実である。普通の school grammar では、先行詞が事物である場合、that, which いずれを使ってもよいとなっている。The New York Times 社の編集、出版している “The Manual of Style and Usage” でも、“‘that’ is preferred” とは書いてあるが、which を使ってはいけない、とは言っていない。にもかかわらず、先行詞が人間以外であれば、関係代名詞はすべて that を使い、which は使われていない。

ここで思い起こされるのは、18世紀頃の英国の文人や学者の多くが、英語に古くからあった関係代名詞 that を使うことを偏狭な Anglicism と敬遠し、that よりかなり後にラテン語の影響で関係代名詞として使われるようになった which や who を使うことを、文法的に正しく、教養のあることとしたという話である (Jespersen: Growth and Structure of the English Language)。当時学問、芸術、宗教の研究の言語としてのラテン語が重視され、英国の学校で教えられたラテン語の文法規範が、言語系統の異なる英語の文法規範としても適用された時代の生み出した状況である。

これに対して、Times の論説委員たちが、事物を先行詞とする関係代名詞の主格、目的格として which を使わず that のみを使うというのは、18世紀の教養人たちと逆の考え方、態度であり、Times の論説の文体、語法にみられる colloquialism や Anglicism の傾向と一致している。

B. 目的格 (accusative) that 及びその省略された場合:

Accusative の場合も、which の例は見あたらず、使われているのは that だけである。それも関係代名詞が現れているのは6例だけで、省略されている方が12例で倍である。調査前の予測では、colloquialism の傾向の強い同紙の論説文のことだから目的格の関係代名詞はほとんどすべて省略されるのではないかと思ったがそうでもなかった。

それで関係代名詞 that の省略されていない例を検討してみると、省略しないそれなりの理由が見出される。

1. Then there was the self-inflicted wound of the irresponsible tax cut *that no one believed Mr. Dole supported in his heart.* (No.6: The Challenge of victory)

この例では、関係代名詞節は、no one believed と ‘believed’ の目的節である Mr. Dole supported (it) in his heart. の2つの文からなる複文である。そして関係代名詞 that を目的語としてとっている動詞は believed ではなく support である。この関係を認識させるために関係代名詞 that を省略しなかったものと考えられる。

2. Those rules, now partially held up by a court challenge, would require the local carriers to rent wires and other facilities at a price that covers the costs *that an efficient company would incur to provide the same facilities.*(No.8; Will MCI Merger Help Consumers?)

この例の場合は、目的格の関係代名詞 *that* で始まる関係代名詞節は先行詞 *the costs* を修飾するのである。そして、この *the costs* 自体はその前の節の名詞句 *a price* を修飾する関係代名詞節 *that covers costs* のなかの名詞句である。言い換えれば、目的格の関係代名詞節は主格の関係代名詞節のなかに組み込まれ、その一部を構成するという構造関係になっている。この複雑な関係を明確にするために、目的格の関係代名詞 *that* を残したものと考えられる。

C. 所有格 (genitive) *whose*:

所有格の *whose* の用例は、制限的用法では、一例しか見あたらなかった。

Most commissioners -- only the chairman, Reed Hundt, resists -- have lined up behind the broadcasters even though the staff has been flooded with conflicting technical and economic studies submitted by the industries *whose financial fortunes will be dictated by the commission's decision.*(No.12; Go Slow on Digital TV)

非制限的用法で *whose* を使った例が一つ見られる。

The conviction of Mr. Erdemovic is an important beginning for the tribunal, *whose indictments will never expire.*(No.20; A Conviction From the Bosnia Tribunal)

これらの例において *whose* の先行詞はいずれも事物であって人間ではない。そしてその一方 *genitive* としての *of + which* の用例は皆無である。このことから Times では、所有格の関係代名詞はすべて *whose* で統一しているのかもしれない。しかし *whose* を使った例も、現時点では、あまりに少ないから即断はできない。

D. 前置詞 + 目的格の関係代名詞 の場合:

前置詞 + *which* の用例は6例ある。

1. For example, their report overlooks ways *in which the Government's calculation could produce the opposite error of underestimating inflation.*(No.4)

2. Second, the bureau's calculation underestimates the extent *to which price rise* because

goods are qualitatively better.(No.4)

3. But a merger without conditions could do customer harm. British Telecom, like regional phone companies in the United States, controls the wires and switches *through which almost all phone calls to British homes and business must pass*.(No.8)

4. By brazenly voiding municipal elections *in which his Socialist Party was soundly defeated by an oppositon coalition*, this political survivor of the Communist era has made it difficult for any Western government to say he is a changed man.(No.17)

5. The format determine, for example, the clarity of the picture and the frequency *with which pictures are "repainted"* onto television screens and computer monitors.(No.18)

6. Critics question the science *on which the rules are based* and argue that the billions they will have to spend on pollution control will not produce comparable health benefits.(No.19)

これに対して、目的格の関係代名詞が省略され、前置詞を関係詞節の末尾に置く事例はすくなく、1例しかない。

Serbia, like the Yugoslave Federation *it belongs to*, holds regular elections.(No.17; Mr.Milosevic Annuls an Election)

他に、目的格の関係代名詞 *that* を残し前置詞を関係詞節の末尾にもってくる用法が1例ある。

The implicit answer *that defense planners seem to have settled upon* is that two major competitors in any line of military work are enough to keep costs low.(No.13; Aerospace Colossus)

関係代名詞が前置詞の目的語であるとき、その前置詞を関係詞節の末尾に置くことは、英語では、特に口語表現では、普通に行われることである。かつては colloquial barbarism と非難されることもあったが、それはラテン文法に影響された school grammar の信奉者たちによってであった。かなり顕著な colloquialism と informality それに少なからず Anglo-Saxon nationalism とでも言うべき語彙の選択、idiom の多用を特徴とする Times の論説委員たちがここで school grammar の規範に従ったとは思えない。

彼らは 前置詞 + 関係代名詞 の形式を主流としているようであるが、それは、意味の明確さということを第一にしているからと思われる。因みに、法律関係の文書をはじめ公的文書ではすべて、「前置詞+関係代名詞」の方式で統一している。

V. 結果のまとめと writing 指導への適用

以上述べてきた調査研究の結果、明らかになったことをまとめると、次のようになる。

- (1) 名詞(句)を修飾する句(節)が受動態文に相当する場合は、ほとんどすべて、その受動態文を構成する過去分詞から始まる分詞句によって、その反面、完全な受動態文を含む関係代名詞節は皆無に近い。
- (2) 名詞(句)を修飾する句(節)が能動態の文になる場合は、関係代名詞節によるものが圧倒的に多く、現在分詞句によるものはきわめて少ない。
- (3) 関係代名詞節による後置き修飾節93例のうち68例、73%が主格の関係代名詞節である。
- (4) 目的格の関係代名詞節によるものは18例で、うち12例では関係代名詞が省略されている。
- (5) 先行詞が事物の場合、関係代名詞は主格の場合も目的格の場合も *that* が用いられ、*which* は使われていない。
- (6) 前置詞+*which* の例は6例、前置詞を関係詞節の末尾に置く例は2例だけ。
- (7) 所有格 *whose* で始まる関係詞節は1例(先行詞は事物)。所有格としての *of* + *whch* の例は見あたらない。

これらのうち、あくまで対象を Times の論説文に限ってのことであるが、(1),(2),(3),(5)の事実はかなり顕著な特徴として注目すべきであり、今後の writing の指導の参考になるのではないだろうか。(6),(7)に関しては事例数が少なく、一般化したり、規則性をいうことはまだできない。今後さらに多くの資料を検討する必要がある。

参考文献

- Curme, G. O. 1972. *Syntax (Asian edition)*. Tokyo: Maruzen.
- Jespersen, O. 1954. *Growth and Structure of the English Language*. Oxford: Basil Blackwell.
- The NYT. 1976. *Manual of Style and Usage*. New York: The New York Times.
- 河上邦雄 1993. "Rhetoric in the Editorial Articles of The New York Times."
「福井工業大学研究紀要」 第24号 pp. 99-108.
- 河上邦雄 1990. "The Five Sentence Patterns and The Modification of Noun and Verb."
「福井高専研究紀要」 第24号 pp. 13-29.
- Akamajian, A. 1992. *An Introduction to Language and Communication*. Cambridge, Mass.: MIT Pr.
- Graver, B. D. 1986. *Advanced English Practice*. Third Ed. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Swan, Michael, 1992. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford Univ. Press.

(平成9年12月5日受理)